鳥獣戯話

花田清輝

講談社版

著者の了解により検印廃止

鳥獣戯話

昭和三十七年二月二十五日　第一刷発行

定価　四九〇円

著者　花田清輝（はなだきよてる）

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者　野間省一

東京都千代田区神田旭町九

印刷所　星野精版印刷株式会社

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所　株式会社　講談社

振替　東京　三九三〇

電話　大塚（九四〇）大表三一一一

©1962　花田清輝

（製本黒柳）

落丁本，乱丁本はおとりかえいたします。

目次

第一章　群猿図……七
第二章　狐草紙……六七
第三章　みみずく大名……一三

箱・挿画　村上豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鳥獸戲話

第一章　群猿図

一

『犬筑波集』には「都より甲斐の国へは程遠し御急ぎあれや日も武田どの」とあるが、いったい、その「武田どの」というのは武田信玄のことをさしているのであろうか。それともその父親の武田信虎のことをさしているのであろうか。あるいはまた特定の個人ではなく、漠然と武田一族のことをさしているのであろうか。いっぱんからは、日もたけた、というのを大名の名前にかけて、もしも武田信玄に天下を統一するつもりがあるのなら、いつまでも甲斐の国あたりでぐずぐずしていないで、さっさと都へ攻めのぼってくるがいい、とうながした句であると考えられている。しかし、『犬筑波集』には、いろいろな異本があり、なかには右の「程遠し」を「程近し」としているものもある位

いであつて、その成立年代についても、永正年間（一五〇四――一五二一）であるのか、大永年間（一五二一――一五二八）であるのか、またはずつと下がつて天文年間（一五三二――一五五五）であるのか、いまだに国文学者たちのあいだでも定説がないらしいのである。天文年間説は、柳亭種彦の引いた松羅館本に、山崎宗鑑が、七十五歳のとき、その本の撰をしたと明記してあるところからきている。とすると、かれが「そうかんはいずくへゆくと人とわば、ちとようありてあのよへといえ」というしやれた辞世をのこして八十九歳で死んだのが、天文二十二年（一五五三）であるから、逆算すれば、『犬筑波集』の成立は、天文八年（一五三九）ということになる。つまり、その当時、信虎は四十二歳、信玄は十九歳だつたわけであつて、息子が父親を追放して自立したのは、それから二年たつたあとの天文十年（一五四一）六月のことである。したがつて、わたしには、その「武田どの」というのは、ぼんやりと武田一族のことをさしているのでないかぎり、信玄のことではなく、信虎のことをさしているような気がするのであるが、如何なものであろう。かりに『犬筑波集』の成立が、大永年間だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つたとすれば、ますます、その「武田どの」は信虎のことにちがいないのだ。なぜなら、大永元年（一五二一）うまれの信玄が、そのころ、まだ少年だつたのに反し、信虎は、すでに守護大名としては屈指の人物であり、将軍義晴から、再三、かれを助けるために上洛するようにと依頼され、甲斐の年代記である『妙法寺記』の大永六年（一五二六）のくだりには、「御屋形様在京めさると風聞す。」と述べられているほどであるからである。むろん、その句が、宗鑑の死後、たとえば信玄の全盛時代に、誰かの手によつて、『犬筑波集』のなかに付け加えられた、といつたようなこともおこり得ないわけではない。もしもそうだとすれば、「武田どの」が信玄をさしていることはいうまでもないが――しかし、そのばあい、その句の作者は、あるいは信虎その人だつたかもしれないとわたしはおもう。というのは、信玄のために甲斐の国をうばわれてしまつた信虎は、駿河を去つて都へのぼり、依然として故郷の附近でまごまごしている野心家の息子を、内心、せせら笑つていたらしい形跡があるからだ。信虎は、かれの一族の大井信達などとともに、連歌師の柴屋軒宗長の弟子であつて、宗長のかいた『宇

津山記』によれば、永正十三年（一五一六）、勝山城を包囲していたさい、宗長のあつせんによつて、連歌興行の席上で、大井氏や今川氏と講和したこともあり、『犬筑波集』のなかに信虎の作品がはいつていたところで、いささかも不思議ではないのである。「都より甲斐の国へは程遠し御急ぎあれや日も武田どの」――わたしには、そこには、たとえその句の作者が信虎ではなかつたにしても、いかにもかれが、一生、かれの息子にたいしていだきつづけていたであろうような意地の悪さが、いともあざやかに表現されているような気がしてならないのだ。

これは、一つには、わたしが、戦国時代における名将のひとりとして誰でもが知つている息子のほうよりも、その息子のために追放され、三十数年間も乱世の巷をうろつきまわらなければならなかつた父親のほうに、ともすれば心をひかれがちであるからであろう。それかあらぬか、わたしは、「武田どの」というと、信玄とともに、さつそく、信虎をおもいうかべないではいられないのである。むろん、父親のほうは、息子にくらべると、ひどく評判が悪い。すくなくとも『甲陽軍鑑』や『武田三代軍記』のなかに描かれているかれは、まさに非のうち

どころのないような「悪大将」であり、「狂気人」である。しかし、わたしには、それらの記録の多くは、たぶんに父親を失脚させた息子の行為を正当化する目的をもつて、息子のエピゴーネンの手でかかれているようにおもわれる。なぜなら、そこで攻撃されている暴君としての信虎は、いかにも暴君らしい暴君であつて、まことに情けない月並みの悪事しかはたらいてはいないからだ。たとえば妊婦の腹をきりさくといつたようなことである。『武田三代軍記』には、「われ累代甲州の大守として威を遠境にふるい、万事、心にまかせずということなし。しかれども、まだ懐胎したる女の腹の中見たく思うことの今に心にまかせぬぞとて、それより孕みたる女をたずねださせ、当月懐胎の女よりして、二月三月乃至十月までの女の腹をきりさきて、男子女子の境を見わけ、または十月までのその間、月々の形勢を見さだめたもうに、すでに十三人までその腹をきりさき殺されけるは目もあてられぬ分野にて、皆人、大いに恐れけり」とある。これは、お家騒動に登場する暴君たちのほとんど例外なく試みる行為であつて、わたしは、そこに、かれらの変質者としての暗い宿命よりも、むしろ、その「悪逆無道」

ぶりを生体解剖といつたようなイメージでしかとらえることのできない、かれらの伝記作者たちの空想力のまずしさをみるものだ。とりわけ信虎のばあいは、胎児の発育過程を、一歩、一歩、粘りづよく調べていつたというのであるから、少々、誇張がすぎていて、かえつて、滑稽な感じがしないこともない。はたしてかれは、そのような科学的探求心の所有者だつたのであろうか。その他、むやみに家来たちを手打ちにしたり、僧侶たちを焼き殺したりしたことが、かれの残酷さを示す例としてあげられているが——しかし、かりにそれが事実だつたとしても、そういつた悪事なら、戦国時代のつねとして、暴君の父親と同様、名将の息子もまた、数しれず犯しており、両者のあいだには、かくべつの相違もみとめられないのである。むろん、こんなことをいうからといつて、わたしには、信虎の悪事を弁護しようというつもりなど、さらさらない。ただ、鳶が鷹をうんだといつたような後世の批評にあきたりないだけのはなしなのだ。そういえば、現在、甲府の大泉寺に残つている、信虎の息子でもあり、信玄の弟でもある信廉（のぶかど）の手になる父親の肖像画にしても、どの程度まで信虎の真のすがたをつた

えているものか、わたしには、うたがわしくてならないのである。なぜなら、画家として有名だつた信廉は、風貌が信玄に瓜二つだつたため、生涯にわたつて、つねに影武者として兄と行動をともにしており、あるいはかれもまた、兄の眼で父親をながめていたのかもしれないとおもわれるからだ。つまり、それほど、その信虎の肖像画は、すさまじい悪党づらをしているのである。剃髪をして、黒衣をまとい、肩から袈裟をかけ、右手にじゆずをもち、あつぱれ行いすましたようなかつこうをしているとはいえ、薄い眉の下に硝子の破片のようなひらめきを放つている、つりあがつた切れながの眼にも、きつとへの字にむすんでいる大きなくちにも、なにか獲物をねらつているときの爬虫類のような薄気味悪さがあり、わたしには、おもいなしか、その怪物のからだからは、もうもうと妖気のようなものが立ちのぼつているような感じがしてならないのだ。むろん、それは、甲冑すがたに身をかため、いかにも英雄らしく肩肱をはつている、同時代の武将たちのありふれた肖像画にくらべると、みごとなできばえであつて、一応、信虎の個性らしいものが、はつきりと、とらえられているようにみえる。しか

し、信廉もまた、信虎の伝記作者たちほどではないにしても、やはり、いくらかかれの父親の邪悪な一面だけを強調しすぎているのではなかろうか。

にもかかわらず、それらの試みは、ことごとく所期の効果をおさめることができなかつたばかりではなく、逆に藪をつついて、蛇をだしたようなおもむきもないではなかつた。なぜなら、いかに腕によりをかけて、信虎のたぐい稀なる悪党ぶりを宣伝してみたところで、そのことが、かならずしも父親を甲斐の国から追いだした息子の行為を合理化することにはならなかつたからである。とりわけ信玄の敵たちは、その点をとりあげて、情け容赦もなく、かれを攻撃した。たとえば織田信長は、将軍義昭への訴状のなかで、「信玄事、父信虎、すでに八十に及ぶ老父を追放せしめ、京・田舎に迷惑し、街に餓うる風情前代未聞の次第なり。」などといつている。上杉謙信もまた、弥彦神社へおさめた「武田晴信悪行之事」のなかで、「直親武田信虎を国より追い出し、牢道乞食に及ばせ、高義を失う事、これ仏神之内証に叶うべからざる事。」といつて糾弾している。いかに悪逆無道の父親であろうと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com